

猪俣弥八年表(1868～1902)

【渡米以前】

明治元年（1868）3月29日、與右衛門とマサの次男として出生。

明治17年（1884）この頃、大磯の叔父の家に泊まり「花街に遊び放蕩」。その後キリスト教に触れ回心し、のち受洗。泰西の書物に触れ原書で読もうと大志を抱き、渡米を決意【『追悼集』3頁】。

明治19年（1886）10月15日、猪俣弥八、猪俣道之輔、宮田寅治ら7名が受洗。

【渡米以後】

明治21年（1888）2月、貨物船で渡米。

明治23年（1890）カリフォルニア高等学校入学。

明治29年（1895）初夏、長老ハリスの嘱によりバカビル村日本人教会牧師の補助員として「娼家排斥運動」に挺身。キャンプ遊説を行う。

明治32年（1899）9月、弥八、オレゴン州立大学入学。

明治33年（1899）9月、梅田、米田、オレゴン州立大学入学。「三奇楼」生活開始。

明治34年（1901）6月、弥八。オレゴン州立大学卒業。6月、伴事務所に雇用される。11月、弥八、ワイオミング州事務所支部長に就任。関澤、梅田と割烹料理店で「栄転」の祝宴を行う。

【弥八惨殺と「追悼集」発刊】

明治35年（1902）5月、弥八、ビリングス銀行に立ち寄り現金350弗をひき出したのち、ポートキャスターに向かうが、その後、行方不明となる。

5月14日、弥八、ワイオミング州黄河湖畔にて惨殺される。

5月24日、弥八の遺体発見。

5月30日、ポートランド・メソジスト教会にて関澤牧師の司会にて「伴氏母堂と猪俣氏の追悼会」が開かれる。来会者60余名。

6月24日、伴新三郎から弟松五郎宛てに書簡が送られて来る。

8月、『落葉』（追悼集）刊行される。

明治37年（1904）3月、弥八墓碑建立。

【家族関係～猪俣与右衛門・マサ】

国治（1866年2月15日～1890年12月4日）弥八の兄、長男。享年23。

松五郎（1870年5月10日～1943年12月24日）弥八の弟、三男、享年72。

(3) 『追悼集』に寄せたハリス夫人の英詩

猪俣の厳肅なる死に際して～寄せられハリス夫人の英詩

若々しい大人の完全な華が、暴力の手によって奪われた。死んだ愛おしい猪俣の記憶に 2002年5月13日 FLORA B HARRIS

君に中実な心臓と手を故国の地の友たちは、もう見ることはできないし、わかり合うこともできない！

中実な人への愛情と手を故国の友は見ることはできないし、触ることもできない。

しかし、この闇のなかで、信仰は強く、止むことはない。神は正しいことを為されます。私たちのこの悲しみはまた、歌で終わるでしょう。

汝らを卑しめる臆病者の手がわれの心臓に打撃を与えた。

しかし、それは神が許したもうたものであった。殺された彼こそが、汚れない真実であった。それを神が示された。

彼の物静かな優しさと、同時にまた、彼の英雄的な青春期の希望を、彼は知ることができない。

ノースランドポート（ニュージーランドの最北端）から金門（ゴールドンゲート海峡）まで、われわれの涙は、彼の運命に対して流された。

もう彼にとって故国へと帰る船はありません。

何と神は彼の運命に対して甘いのでしょうか。

気の毒に、思います。

彼に与えられた運命は、われわれにとってどうしようもないものです。

われらは彼のために、時計の針を止めておきましょう。

少しも眼に見えなくても、より光明正大で、彼岸の岸の上からわれわれを見ていることでしょう。

彼は永遠に、かの岸の上に立っている。

彼は亡くなってしまったが、彼の立派な精神は塵ではない。

生き続けて、われわれに喜びを与え続けている。

神の子以外、誰も信託を受けることはない。

彼と神によってつくられた彼の生涯は、まさに素晴らしい芸術であった。

"Faithful Unto Death"

In loving memory of Y. Inomata who, faithful to
his duty, died by the hand of violence, May 13, '02

O brother from Yamato's land,
O friend of loyal heart and hand,
We cannot see nor understand!

Yet in the darkness, faith is strong,
THY GOD—our God—shall right the wrong,
Our sorrow yet shall end in song.

The coward's hand which laid thee low,
To all our hearts hath sent the blow—
Yet God forgive—he could not know—

He could not know thy stainless truth,
Thy quiet gentleness and ruth,
The hopes of thy heroic youth.

* * * * *

From Northland port to Golden Gate,
Our tears are offered for thy fate—
For thee no homeward ship shall wait—

God's sweetest pity therefore be
On all beyond our sunset sea,
Who keep their watch in vain for thee!

On some unseen and fairer shore
Thou bidest now forevermore,
Thy noble spirit is not dust,
But child of Him who was thy trust;
Thou art with Him, and HE IS JUST!